

2014年7月15日



## うかつ謝り

GNH研究所 代表幹事 平山修一

先日、電車の車内で驚いたことがありました。駅を発車した電車が急にブレーキをかけた為、拍子で隣に立っていた男の人の足を踏んでしまったのです。

『ごめんなさい』ととっさに言ったのですが、その時、相手の人も『ごめんなさい』と私に言ったのです。

何故足を踏まれた方が謝るんだろう……。友人にこのことを話すと『それは足を踏まれてもとっさに避けられなくてごめんなさい。貴方に不快な気分を起こさせてしまいごめんなさいという意味合いで言ったのでは』と言われ納得しました。

確かに足を踏まれた方が『このやろう』と言った瞬間からその場の雰囲気はとても悪くなりますよね。でも踏まれた方が謝るとその場の雰囲気がとても和らぐことでしょう。

南アジアのある国ではある人が誤って物を壊してしまったときにも『これはそういう運命だったんだ』と持ち主が言うことがあります。これも責任をあえて明確にしないという気配りです。大人の対応ですよ。

場所は変わって日本の江戸。今のようにテレビもラジオもない時代、極端に言えば鹿児島と新潟は別の国、今より話し言葉の訛りもきつく、お互いのコミュニケーションもうまくとれない場合もしばしばあったでしょう。

そんな多種多様な文化や伝統の背景を持つ人たちが集まり暮らす町では様々なトラブルも起きやすかったと思われれます。これは考えようによっては今の日本も同じですよ。地方出身の人のみならず、多くの外国人も住んでいます。

足を踏まれてもとっさに避けられなかった自分のうかつさを恥じる、これは江戸しぐさでは『うかつ謝り』と言われていています。本当は痛くても『てやんで〜これっきしの事、なんでもねーや』と痩せ我慢をするのが当時の粋な江戸っ子だったのでしょう。

アジアの多くの国では同じように『問題ない』という言葉多用して、相手とのトラブルを回避しようとしています。こうした姿勢は私たち日本人もたまには真似してみると、世の中が少しは明るくなるかもしれませんね。

# 「子どもの守り方」

青木 薫

ブータンと日本を行ったり来たりする生活を続けて早16年。近頃、気になることがある。それは、日本社会の「子どもの守り方」である。

駅で新幹線を待つ間、地下街を見物していた時のこと、キャラクターものが並ぶお店で、ジッパーが開いたままのリュックを背負った女の子を見かけた。中の荷物が落ちそうである。私は「お嬢ちゃん、かばんが開いてるよ。」と言いつつ、ジッパーを閉めてあげた。と、どこから現れたか「うちの子に、何するんですか?!」と若い母親。いや、お嬢さんのかばんが開いていたので・・・という返事なんて聞きもせず、母親は私を睨みつけると女の子を引きずって行ってしまった。「ちょっと〜?!」と叫びたい私を残して。

日本では子どもを巻き込んだ事件が後を絶たない。他人による犯罪だけでなく、実の親が子どもを置き去りにして餓死させることもあるという悲しい時代だ。保護者や学校が子どもたちを守るために神経質になるのは理解できる。しかし子どもの安全を考えるあまり、子ども達を囲い込み地域社会と切り離すことで逆にリスクを高めている気もする。日常は地域の大人たちの善意を拒絶しているくせに、いざことが起こると「声を出して周囲の大人に助けを求めましょう!」なんて、そんな理屈がうまく機能するわけがない。何しろ相手は善意も悪意もいっしょくたに切り捨てている集団なのだから関わるとロクなことはないと、母親

に睨みつけられた善意のオバちゃんなどが考えたとしても仕方ない。結果、子どもが転んでも、さまよっていても、しばらく姿が見えなくても(実際はアパートの一室で虐待されていても)、反応しない無関心な社会が出来上がるわけだ。

子どもの虐待はブータンにも存在する。私は義姉の家に住まいのころ、向かいの集合住宅の階段を親に蹴られて転がり落ちた子どもを目撃したことがある。庭先で織りをしていた義姉は箒を放り出して駆けつけた。近所の人も住いから飛び出してきて一騒動に。その子は当然のように義姉の家で食事をし甥や姪たちと一緒に眠った。

この体験はその後、私の「おせっかい魂」の基盤になった。保護者や教師でなくとも我々大人には、善意と悪意を区別する能力のない子供たちに積極的に関わる義務がある。加えて保護者や学校という限定コミュニティの人々は、地域社会の大人を巻き込んだ安全対策を模索すべきだ。例えば子どもがいなくても学校の催しに招待するなど、子どもと地域の大人が知り合う機会を増やすべきだ。

「おせっかい」は社会を変える。まずは近所で通学の子供たちに「おはよう!」と声をかけることから始めよう。



青木 薫 (あおき かおる)

GNH研究所 研究員

ブータン在住16年。2000年より首都ティンブーにて旅行会社を営む。2011年にブータン初の日本語学校 (BCJS) を開校。

# 「GNHと犬の幸せ」

森靖之

昨年9月に、母が亡くなりました。紀州犬の愛犬「白樹」が一匹残され、私は引き続き世話をしていましたが、11月頃に隣人から「白樹君喧嘩でもしたの」と言われ、見てみると、まるで因幡の白ウサギのように腹部が真っ赤に腫れ上がっていました。急ぎ、獣医さんに診せましたら、心因性のアトピーとの診断。獣医さんから「何か大きな環境の変化がありましたか」と聞かれました。飼い主が死亡したことを告げると、「それが原因だろう」と言われました。犬は環境の変化に過敏で、特に飼い主が見えなくなると病気になることがよくあるそうです。今は、薬の効果と私が付きっきりなので、すっかり元気で、母のことも少しづつ忘れてきているようです。

ブータンにいた時のこと、隣の家の犬を可愛がっていたのですが、ある日、街中を歩いていたら、ブータンに住んでいた人なら誰でも知っている犬害に会いそうになりました。4・5頭の犬に囲まれ、今にも噛みつかれそうになった時、一頭の犬が矢のように飛んできて私の前に立ちはだかり、私を囲んでいた犬たちを威嚇しました。おかげで、私は噛まれることなく救われました。その犬が隣の犬でした。犬は、親しい人を身を挺して救うことがあることを初めて実感しました。

犬は、古くからの人の友人で、家族の一員と言われてますが、GNHの考えには犬も入れていただいているのでしょうか。野犬の多いブータンでは、シェルターを建設したり、繁殖し過ぎを防ぐために、我が国からも獣医が出かけて去勢や避妊の手術をしてましたが、人と犬が共存していくには必要な処置と思ってます。

犬は愛玩用だけでなく、古くは、猟犬や牧羊犬だけでなく、現在では、体の不自由な人への盲導犬・聴導犬・介助犬、セラピー犬、災害救助のた

めの山岳・水難・地震救助、犯罪探知のための麻薬犬、警察犬、更には、獣害駆除犬、放火探知犬、遺体探知犬などで人の生活の様々な場面で活躍しています。

犬が人と共存して、犬自身が幸せになることもGNHの考えに入れていただけるといいと思うのは、愛犬家ゆえの我儘でしょうか。

私は、帰国後に犬の訓練士になろうと、犬訓練校のパンフレットを取り寄せたのですが、受験資格が30歳までとあり諦めました。今は、愛犬「白樹」君の幸せのためにと親しく付き合っています。

ブータンの犬



愛犬「白樹」

森 靖之 (もり やすゆき)

GNH研究所 研究員

2000年初頭~2003年末までの約4年間、  
JICAブータン事務所長として勤務。

定年退職後、2005年に愛知万博ブータン館  
でブータン人館長を補佐。

## 会員コラム

# 「実は、誰もブータンを羨ましいとは思っていない。」

高島 淳

何の裏付けもなく仮説として強い掲題としました。GNH研究所が、ゆるやかな集まりであって欲しいので躊躇はしましたが、同時に強い気持ちがなくは新たな価値に踏み出すのも難しいです。新参者からの挑戦としてお読みください。

### ●GNHは、いつまでブータンの持ち物なのか。

GNHの概念をはじめて知ったとき、自分はそこにすぎたのだと思う。日本社会から寛容さが失われ、居心地の悪さを日々感じていれば当然のこと。個人的には幸福に生きてこられた。だから、すがりたかったのは、未来への選択にGNHを指標とするような動きを期待してである。日本国内でのGNHの認知度を調べたが探しきれなかった。周囲を見渡しても、それほど多くの方がGNHを知っているようには思えない。認知されている方は、おそらくブータンがヒモ付いて記憶されているだろう。そんな方との会話では、「ブータンは素晴らしい。」「GNHは日本にも大切だよ。」と、一応話は盛り上がる。ただ、違和感が残る。SNSで、いいね!をするような軽さ。感じるのは、実は日本人はしあわせだと言うこと。ブータンを羨ましい、学びたいとクチにはするが、明らかに優越意識を捨てられない。考えていただきたい。妬み、嫉みといった感情は人の心にそもそも与えられたもの、日常的に顔を覗かせる。身近な他者の幸福、例えば、評価される人物、豊かな暮らしぶりなどに敏感に反応する。自身の実利的到達点

と重なる他者の幸福には強い感情がでる。では、ブータンを羨ましく思うのか。余裕を持ちながら見つめている自分がいる。経済的には、まだまだ豊かな国に住んでいる。その優越意識は、かなりの根っこまでを支配している。GNHがブータンとセットで語られている内は、この国で本気の議論はできない。ブータンの話ではない、日本のGNHを話したいのだ。

### ●ごめんなさい。謝ります。

挑戦文は以上がすべてです。ブータンを愛されている方、研究されている方には失礼な締め方をしたのをお許しください。14/05/24定例会で話しきれなかったこととしてまとめました。GNH研究所は、ブータンというコトバを使用せず国名を重ねてイメージさせます。当初は、“ブータン”研究所として参加された方が多かったとも伺いました。GNHはすでに世界的なモノサシ。提唱国ブータンは、GNHに縛られ、かえって不自由になるのではとも危惧します。しあわせは人それぞれ。GNHも国それぞれでは、いけないのでしょうか。ブータン人も日本人も、一人ひとりがいまよりしあわせを感じられる社会に。心の持ちようと思いますが、それが難しいのでしょうか。

高島 淳 (たかばたけ じゅん)

GNH研究所 会員

1960年代生まれ、男、会社員。2013年12月から当会会員に。仕事で、しあわせと経済活動を結びつけた社会還元型の事業を準備中。



故井上ひさしさんの小説に、吉里吉里人と言うのがいる。政府に愛想を尽かし独立国を宣言する話。岩手県の大槌町には吉里吉里のバス停が。3.11の津波被害がいまも残っている。

# 東京定例会合報告

2014年5月24日開催

文責 平山雄大 (GNH研究所 東京事務局)

## ●概要

- ・日時 2014年5月24日 (土) 15:00~17:30
- ・場所 早稲田大学 16号館 606教室

## ●内容

### ①2013年度の活動の振り返り

### ②今後の活動について

今回の会合は、「GNH研究所2013年度活動の振り返りと今後」と題し、会員限定の企画として実施しました。

前半は、2013年度の東京定例会合 (全4回) 及びGNH研究所のプロジェクトとして研究員の平山 (雄) が中心となって開催したGNH勉強会 (全12回) の内容を概観するとともに、2013年度の活動全体を振り返るにあたり、2013年3月の東京定例会合後半 (GNH研究所でやりたいことについての話し合い) において出された意見を大きく6項目に分け、それぞれに関して、以下の通り3段階 (○、△、×) 評価を行いました。

#### A. プロジェクトの実施 ⇒ 研究の成果物の作成

- ・ブータン側のGNHに関する資料にリンクを貼る
  - × 未実施
- ・GNHに関する文献の目録・アーカイブを作成
  - △ GNH勉強会 (全12回) により、ある程度まとまる (平山 (雄) の個人研究として)
- ・ブータン研究センターとの共同研究を行う
  - × 未実施
- ・翻訳プロジェクト第2弾を実施する
  - △ 『昨日よりも少しだけ幸福になるための12のヒント』英訳 (書籍翻訳は未実施)

#### B. アウトプットの充実

- ・外への発信を意識する
  - × 未実施

- ・FacebookやTwitterをもっと活用する

△ 会合開催の告知等にのみ利用

- ・ホームページをリニューアルする

× 未実施

- ・ニュースレターの作成を継続する

○ 第8号 (2014年4月1日) まで刊行

#### C. 運営方法の改善

- ・分科会を実施する

○ 年間を通してGNH勉強会 (全12回) を開催

- ・ブータンのかたに講師に来てもらう

× 未実施

#### D. 実践への応用

- ・終末医療にGNHの要素を取り入れる

× 未実施

- ・町づくりのプロジェクトに活かす

△ 代表幹事・平山 (修) が岡山県総社市にて実践

#### E. ゆるい集まりの維持

- ・ゆるい集まりであり続ける

△ 新規会員は伸び悩み

- ・存続し続けること自体にも意義がある

△ 定例会合を継続するも、徐々に参加者減少

#### F. 会員の繋がり強化

- ・地方の会員を巻き込む

△ ティンパーにおいて、2度に渡りGNH勉強会を実施 (国内地方都市では未実施)

- ・会合の共有方法を再考する

△ 2013年6月東京定例会合をYouTubeにて映像試験配信 (その後、定着せず)

- ・各会員がGNHをどう考えているのかを再度共有

× 未実施

(次頁へ続く)

後半は、会合参加者のももとの興味・関心を振り返ることからはじめ、GNH研究所の今後の活動の在りかたに関して意見出しを行いました。GNH研究所としてのミッション（従来のGNH研究は「GNH≒ブータン」で語られる事が多々ありました。我々はブータンという枠に捕らわれず、そして具体的に「GNH理論を我々の実社会でどのように活かすか」「どうすれば幸福感あふれる社会で暮らすことが出来るか」を会員の皆さんと一緒に楽しく、しかも学術的に考え、そして行動しようとしています。）を改めて確認すると同時に、定例会合のマンネリ化及び参加者減少の打開策についても多くの案が出され、有意義な時間となりました。出された主な意見は以下の通りです。

#### 【マンネリ化／参加者減少の打開策】

- ・会員の興味関心を踏まえたテーマを取り上げる  
⇒会員がどんどん意見を出す⇒定例会合のテーマのストックを作っておく
- ・会員がテーマを気軽に提供できる雰囲気作り
- ・会員の個人活動にGNH研究所としてどう協力できるかを考える
- ・定例会合を会員の活動の発表の場とし、情報の提供／問題の解決を目指す

- ・年齢の幅（+多様性、流動性）を考慮する
- ・ワールドカフェ・スタイルを見直す

#### 【今後やりたいこと】

- ・GNH研究所としての幸せの指針・指標をまとめる
- ・ゆるい集まりの維持
- ・メーリングリストの再活性化
- ・会員リストの作成
- ・事務局サポーター制度の創設
- ・会員の声をニュースレター、ウェブサイト、Facebook公式ページ等に掲載する
- ・テーマをひとつ決めてディスカッションをする
- ・GNH研究所設立10周年（2015年3月）の企画（出版、シンポジウム等）を検討する

会合終了後は、スペイン料理屋「バルDESSE」にて懇親会が開催されました。事務局としては、今回の会合の前半と後半の内容を繋げ、今後の活動に積極的に活かしていきたいと考えております。定例会合の方法や取り上げるテーマに関するご意見／リクエストは常時募っております。ご協力よろしくお願ひいたします。



5月東京定例会合の様子

## 掲示板

### ● 新刊書籍「幸福の国」と呼ばれて——ブータンの知性が語るGNH〈国民総幸福〉

「ブータンに生まれ育ち、そこに暮らす筆者の眼を通して、GNHの実像が等身大に伝えられる—」  
(出版社ホームページより)

著：キンレ・ドルジ (訳：真崎克彦/菊地めぐみ)

定価：本体2200円+税

出版：コモンズ社

<http://www.commonsonline.co.jp/>

### ● 「第19回ブータン勉強会」開催

当研究所 研究員の須藤・平山(雄)が主宰する日本ブータン研究所では、「第19回ブータン勉強会」を下記の通り開催します。

日時：2014年7月19日(土) 14:00~16:00

場所：早稲田大学 16号館606教室(予定)  
東京都新宿区西早稲田1-6-1

発表題目及び発表者：

「NHK特集「秘境ブータン」制作の思い出—ブータン1982—」 後藤 多聞 (元NHKプロデューサー／公益財団法人平山郁夫シルクロード美術館理事)

参加費：なし

参加申し込み：参加を希望されるかたは、「1.氏名、2.連絡先(電話番号及びメールアドレス)」をメール本文に記載し、下記までお申し込みください。

平山雄大 [hirayama12345@hotmail.com](mailto:hirayama12345@hotmail.com)

## 編集後記

ブラジルワールドカップが佳境に入っています(この号が発刊される頃には、優勝国が決まっているはずです)。サッカーを通して国中が一喜一憂している姿を見ていると、勝負事ゆえの厳しさと、しかし、そうであるがゆえの勝利の喜びの大きさが浮かび上がってきます。楽しんで「幸福」に行き着く道はあるのか、そんな疑問がわいてきています。(藤原整)



©KENSAKU SEKI

## GNH研究所 ニュースレター 第9号

発行元 GNH研究所 (代表幹事：平山修一)

<http://www.gnh-study.com/>

発行日 2014年7月15日

編集者 高田忠典 (GNH研究所 研究員)、藤原整 (GNH研究所 研究員)

著者 平山修一 (p.1), 青木薫 (p.2), 森靖之 (p.3), 高島淳 (p.4), 平山雄大 (p.5,6)

写真 関健作 (p.1,7), 青木薫 (p.2), 藤原整 (p.3上), 森靖之 (p.3下), 高島淳 (p.4), 平山雄大 (p.5,6)

※全ての著作物および写真の著作権は、上記の方々に帰属しています。